

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	久留 智之	研究活動ではギター作品のリサイタル開催、およびCD制作に向けての創作が中心となった。制作時間の確保は昨年度に引き続きの課題である。教育活動では修士在学中の担当学生が現音新人賞を受賞。大学運営では数年かけて準備した外国人客員教員をイタリアのポローニャ音楽院から招聘し、コンサートやセミナーなどを開催できたことは地方在住の本学学生への刺激になったと考えている。
作曲	教授	小林 聡	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献のすべての分野に渡り、及第点には達していると思う。殊に国際交流に関してはかなり力を入れてきたと思う。研究活動にもう少し時間を取れるよう、スケジュールを調整してゆきたい。
作曲	准教授	山本 裕之	研究・教育・運営活動は概ね目標を達成したと思われる。特に科研費にかかる研究については前進した感があり、自身では一応の納得をしている。また教育活動のうち、懸案の和声教材については部会でも始動したので、今後いっそう進めていく基盤ができつつあると考えている。一方で自身の研究（作曲）活動が他の業務に圧迫され、なかなか時間が取れていない。作曲は机に向かうだけが活動時間ではなく、（どの創作活動もそうだが）日常生活時間における熟思が重要である。しかしそのような大事な時間がなかなか得られないことが今後の作品の質に影響してくることを懸念している。
作曲	准教授	成本 理香	着任1年目である今年度は、すべての業務について初心者であり、同僚の力を借りながらなんとかこなして来られたと思う。すべての項目について計画通り一定の成果はあげられたと思うが、研究と創作の時間を捻出するのが大変難しい状況であった。特に今年度は論文執筆の時間が思うようにとれなかったため、今後の課題である。
音楽学	教授	増山 賢治	上記のとおり、各目標を十分に達成したと考える。特に論文と留学生指導に関しては学内外に確固たる貢献をしたと言える。
音楽学	教授	井上 さつき	年度当初に計画したことはおおむね実施できた。特に「病院アウトリーチ・プロジェクト」は新しい試みとして有益であった。その反面、時間的な制約のため、科研費の研究が思うように進まなかったのは残念である。
音楽学	教授	安原 雅之	日常的に、さまざまな業務に追われている。それぞれの業務を、効率良くこなせるよう工夫して対処していきたい。
声楽	教授	戸山 俊樹	年々、社会貢献と特に大学運営の比重が増す中、量はともかく研究活動における質をどう向上させていくかが重要な課題となる。教育の質の向上にも直接、繋がること故。
声楽	教授	末吉 利行	レジデンスにおける教育効果は大きく、留学を希望する学生の指針となった。一般の方達、受験生との関わりは大学教員にとって益々重要で不可欠なものになると確信しており、十分に貢献できている。大学運営においても将来を見据えた教員配置、教育内容の検討をすすめている。研究活動においても研鑽を積む機会に恵まれ、指導に役立つスキルアップができている。
声楽	教授	中巻 寛子	全体的に見て、学務、特に大学運営活動に特に多くの時間を割いた一年であったと言える。それによって、大過なく多くの事案を処理できたことは幸いであった。一方、研究活動に関しては、年度の前半に比較的大きな演奏会を置いて研究を行ったことで、それなりに充実した内容を持った演奏ができたと考えている。しかしながら、論文執筆に関しては、そこに集中するだけの時間を確保することが困難であった。来年度はこの分野の充実を目指したい。
声楽	教授	森川 栄子	全般的にはおおむね予定通りに行えたと考える。教育活動の面では、昨年度に続き指導の成果を目に見える形で得ることができた。また研究活動においては、演奏活動の回数は例年より少なかったが、近い将来の活動へ向けての準備に、昨年度よりは時間を費やすことが出来た。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	准教授	川島 幸子	<p>本年度は、やはり長年研究してきたリチャルト・シュトラウスの歌曲とオペラのリサイタルを、学長特別研究費と芸術講座の両方のサポートで開催し、また他専攻の先生方に多数共演していただき、大変充実したリサイタルを実現出来、研究成果を発表出来たことが一番の収穫であった。</p> <p>来年度も引き続き、研究と演奏の両立を目指し、研究室に所属する学生に対して実りある授業が出来るよう自身の研究に励みたい。また、より良い環境で学生が学べるよう積極的に大学運営にも参加していきたい。</p>
声楽	准教授	初鹿野 剛	<p>本学の創立50周年事業が一段落した今年度は、概ね計画通りの大学運営、教育活動、研究活動等をすることが出来た。本学のオペラのことあり、来年度以降、これまで以上に地域の音楽関係者と交流、意見交換をしながら、社会貢献を進めていきたい。</p>
ピアノ	教授	松本 総一郎	<p>本学法人化以降、大学運営や教育への負担が増え続けていく中で、如何にして自身の研究時間を捻出し、自分なりの成果を上げていくのか、大学業務との板挟みの中で試練の日々が続いている。</p>
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	<p>自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。</p>
ピアノ	教授	北住 淳	<p>本学の教育研究方針に則った、芸術大学教員としての活動を継続している。多様な活動のそれぞれが別の活動に繋がって行くような、独自性と相互性の両立を目指してこれからも活動を続けたい。</p>
ピアノ	教授	掛谷 勇三	<p>大学運営面においては認証評価委員として自己評価書執筆を井出准教授と共同で担当し、大学認証評価において良好な判断を得た。しかし6月末までの自己評価書作成業務、10月の訪問調査へ向けた準備と対応、2月の最終評価案の確認など、昨年度秋から続いた仕事量の多さのため、肉体的にも精神的にも過労状態となり、睡眠障害や抑うつ状態、視力低下、重度の肩こり、胸部圧迫感、腰痛などを発症した。認証評価業務のために授業の休講を余儀なくされることも多く、その補講対応によって各学期末まで多忙を極めた。</p> <p>研究・教育面においては専門実技指導にある程度の成果が見られたものの、授業と並行してこの1年半の間に経験した程の量の大学運営業務を課せられては、ピアノ独奏分野の研究活動を全く遂行できないばかりか、通常の睡眠時間の確保すらままならず、自分の健康を維持することもできなかった。これは当然のことながら授業の質にも負の影響を及ぼしていると思われる。</p> <p>これまで14年間の在職期間を振り返ってみると、大学整備マスタープラン作成や県への度重なる整備要望作成、新校舎建設に関わる作業等を行った施設整備委員会、5年以上委員長を務めた演奏委員会、アーティスト・イン・レジデンスやサテライト講座など新たな取り組みをスタートさせた、法人化直後の芸術創造センター運営委員会、そして今回の認証評価・自己評価書作成業務など、それぞれにおいて大学運営にあまりにも多くの時間を費やしており、研究活動の大きな障壁となっている。これを私自身の自己点検・評価における改善すべき重大な問題点と捉え、今後は自分に課された本来の主要職務のひとつである「研究」を充実させることを目標とし、それを犠牲にしてまで大学運営に時間を割かないことを徹底させたい。</p>
ピアノ	准教授	内本 久美	<p>個々の学生の個性を生かすようなレッスンを心がけた。今後もより細やかな対応をしていきたいと思う。</p> <p>イタリアのレーベルStradivariusからソロCDをリリースし、自己研究課題である現代音楽の研究に関して、一つの目標を達したと言える。数々の演奏会を通し、社会との繋がりを持てるよう努めた。</p>
ピアノ	准教授	鈴木 謙一郎	<p>教育においては生徒の内在于いる音楽を具現化して外に解き放つことを指導の目的とし、そのために単なる技術のためのトレーニングではなく音楽を表現する技術を身につけるためのトレーニングを心がける。</p> <p>公開講座などでは、できる限り県芸アシストの方やNEXT30など、外部の方々に足を運んでもらえるようつとめた。社会との接点を今後も広げ、芸術文化の魅力を発信できるよう努力したい。</p>

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
ピアノ	准教授	中尾 純	限られた時間の中で充実した演奏ができた。演奏を通じて国内外の関係者との交流も今まで以上に活性化することができた。その結果、多くの学生がより積極的に課題に取り組んでくれた。
弦楽器	教授	百武 由紀	最後の年にふさわしく、盛り沢山の演奏会、多くの学生指導を通して、学校への今後の期待も益々膨らむ。
弦楽器	教授	福本 泰之	50周年事業も終え平生を取り戻した中、教育・研究面では大きな成果があった。反面、精神的にも時間的にも運営面に比重が十分かけられなかったという反省も残った。
弦楽器	教授	花崎 薫	今年度は大学運営として初めて人事委員長という職を拝命し取り組んだ。関係各位との協力関係を築け、優秀な人材を採用できたことに感謝したい。アーティスト・イン・レジデンスでケルン音大から素晴らしいチェロの教授を招聘できたことは学生のみならず私個人としても、同じ音楽家として大いに学ぶことが多かった。この2点を今年度特筆すべきこととしてあげたい。
弦楽器	教授	白石 禮子	研究活動では、一昨年度より行っているブラームス室内楽全曲演奏会シリーズや芸術講座／メシアン・ラヴェル演奏会等の成功、教育活動でも、指導した学生が卒業試験や学外コンクールにて優秀な成績を収める等、研究・教育の両面に於いて手ごたえのある成果を残した。社会貢献の部分でも、複数のコンクール審査員等の活動を行った。
弦楽器	准教授	桐山 建志	特に研究活動で大きな成果を残せた一年であったと思う。大学運営では、各委員会の会議時間の調整など、積極的に取り組みたくても不可能な面があった。
管打楽器	特任教授	杉木 峯夫	研究活動・教育活動・社会貢献については概ね目標を達成する事ができたが大学運営に関する施設整備（新しい時代に対応する施設整備の充実）については達成できなかった。
管打楽器	准教授	倉田 寛	自己研究・教育・大学運営・地域連携などバランスを保つことの難しさを痛感した年でもありましたが、一定の成果を挙げられたとも感じられました。年々少子化が進む中、芸術のあり方や今後の発展を見据え、自己研鑽と共に教育者として芸術の大切さを学生に伝えていければと思います。
管打楽器	准教授	原田 綾子	計画は、期待通りの成果が得られたと思う。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	研究活動では、多数のプロオーケストラで首席客演奏者を務めた他、ソロ、室内楽等多岐にわたる活動が行えた。大学運営はコースの人数が足りなく、多くの委員会を兼任し精神的にも困難を極めたが、何とか乗り切る事が出来たと思う。教育活動では、試演会を多く開催したことで学生たちが切磋琢磨し、外部オーディションやコンクールで良い結果をもたらした。本学に世界的なフルート奏者 E・パコ氏を招聘しマスタークラスを開催した事も、学生達には良い経験になったと思う。
教養	教授	松野 修	ホークスビーの業績が後の公開科学実験講座に与えた影響について研究を深め、その成果を本学紀要、欧州科学教育研究会、英国科学教育学会などで発表するとともに、教師向けの講座などでも講演した。大学運営に関しては教職課程の責任者等としての職責を果たした。
教養	教授	三宮 敦生	教育面では、授業評価アンケートの結果より、学生が十分に満足する授業ができたと思われる。学生の理解力の高さに助けられたのはもちろんである。研究面では、色々と目移りして、一つのことを深めるには至らなかったのは反省点である。大学運営面では、図書館の業務を理解するのに精一杯だったが、見ることも聞くこともすべてが新鮮で、懇切丁寧なご指導を頂いた図書館成田係長のおかげで充実した一年となった。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
教養	教授	水野 留規	<p>芸術と関係が深いイタリア語・イタリア文学・西洋文化史を本学では教えるようにしているが、今年度もネイティブの非常勤講師や海外協定校のサレルノ大学との連携により、今日的で、質の高いプログラムを提供することができた。学生のアンケートなどを見ても、ほぼ満足のいく結果が得られたと思っている。イタリア語を複数年にわたって学んできた学生の中から、長期留学に挑戦する者や外部機関の資格試験を受ける者を多数輩出することができたことも特筆すべき成果であった。またサレルノ大学学生への指導、カルチャーセンターでの講義、出版社との契約に基づく執筆活動も積極的に展開した。これらの作業に多大な時間を要したので、例年のように紀要に論文を載せられなかったのが残念である。大学運営面では、人事委員会委員として、昨年度に続いて新任教員の採用のための作業に従事した。紀要委員会委員長として今年度も紀要の発行に向けた準備を進め、予定通り年度末に発行できる見込みである。</p>
教養	准教授	井上 彩	<p>研究活動に関しては科研費による助成のおかげで国際学会に2回参加でき、共同研究も含めて国内・国際学会発表3件、論文1本、その他研究発表1件、と研究を進めることができた。教育活動では履修者数が超過した授業を分割することにより教育環境を大幅に改善することができた。大学運営には委員会を通じてできる限り取り組んだ。次年度は科研費による研究成果が出せるよう論文執筆のための時間を確保したい。</p>
教養	准教授	大塚 直	<p>平成29年度は、研究活動に力を入れた。昨年度いただいた愛知県立芸術大学学長特別教員研究費「劇作家エデン・フォン・ホルヴァートの後期戯曲について」による研究成果の一部を学術論文にまとめた。 また教育活動や地域貢献においても、継続して精力的な活動を心がけた。</p>
教養	准教授	中根 多恵	<p>研究活動では、これまでの研究成果を出版、学会報告をとおしてアウトプットすることはできたが、今後の研究展開を見据えた準備は次年度以降の課題である。教育活動では、履修生のニーズに沿いながら興味関心を引き出すための指導方法を追求し、授業展開の工夫に努めた。大学運営では、担当する委員会にすべて出席し、学内外の状況把に取り組んだ。</p>